

群馬大学医学部附属病院

■ 病床数 725床 ■ 職員数 1884人 ■ DPC/PDPS 2003年4月

■ 所在地 群馬県前橋市昭和町3-39-15 ■ ホームページ <http://hospital.med.gunma-u.ac.jp/>



1 正門方向から見た外観 2 1階のアメニティモール 3 増設した自家発電装置を収めた建物のエントランス 4 2階の外来化学療法センター 5 重粒子線医学センター

診療情報管理士がHOMASを運営 部署ごとの数値目標設定に活用

国立大学病院向けに開発された病院管理会計システムを上手に使いこなしている群馬大学医学部附属病院。その秘訣は医事に精通した診療情報管理士がサポートすること。各部署の目標設定やDPCと実際の薬剤費の比較などに活用している。

群馬大学医学部附属病院がDPC対象病院となった翌年の2004年に群馬大学は国立大学法人となった。大学の法人化をきっかけに同病院は経営

的にも順調な発展を遂げてきた。それは図1に示した各指標からも明らかだ。

この理由を、病院長の野島美久氏

は、「各職員の経営意識の高まりの結果」とみている。「大学の法人化以降、当院では適宜経営方針と数値目標を定めており、それは約50ある全部門にも徹底しています。部署ごとに定めた方針と数値目標を経営側がヒアリングします。そして決定したものは実行に移し、進捗状況を確認しつつ、年度末に自己評価をして次年度の計画につなげていくという、PDCAサイクルを回しています」(野島氏)。この取り組みが、各職員の経営への参加意識を高めている。

限界利益を提示して 変動費のチェックに活用

経営方針と数値目標を定めるうえでの基礎となるのが、国立大学病院管理会計システムのHOMAS (University Hospital Management Accounting System) から得られるデータだ(図2)。同病院では2004年1月にHOMASを導入した。現在は、経

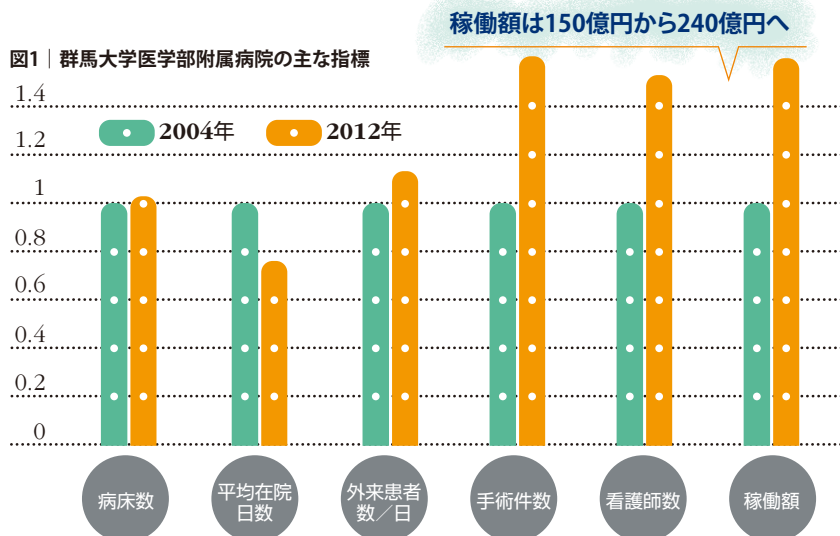


図1 | 群馬大学医学部附属病院の主な指標
2004年の値を1としたときの2012年の値の指数。平均在院日数は減少し、他の項目は増加を示している。

営企画課が毎月診療科ごとの限界利益を算出して院内情報システムにアップしている。各診療科がその都度チェックすることで改善を図ったり、医療サービス課はレセプトデータを出来高とDPCで比較して問題点を探ったりと、部署ごとに利用の仕方は様々だ。

HOMASは病院内のオーダリング、医事、物流、人事、給与などのあらゆるシステムと連動するため、多角的な分析が可能になり、使いこなせば強力な経営支援ツールとして利用できる。だが、各システムからのデータ取り込みが難しいため、HOMASを使いこなしている医療機関は少なく、同病院は良い手本とされている。

診療情報管理士が多く所属する医療サービス課課長の小出利一氏は「システムを活用するには、担当者が医事業務にも精通している必要があります。また事務部門の特定の課だけではなく、各部署が協力しないとデータを適切に取り込めません」と語る。

同病院の16人の診療情報管理士は2003年のDPC/PDPSへの参加をきっかけに資格を取得した。HOMASの導入、運営や法人化といった変化に対応したのは、この診療情報管理士たちだった。野島氏は彼らを評価するとともに、「国立大学法人なので、病院の事情と関係なく事務系職員の人事異動がありますが、彼らがずっと任に就いていたことが幸いしています」と、その幸運にも感謝している。

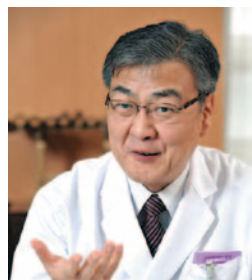
■ 先進医療に取り組み 災害時拠点病院として整備

経営が安定している同病院は、大学病院としての役割を果たすための投資にも積極的だ。

がん治療では外来化学療法センターに次いで、2010年3月に、群馬県との共同事業で重粒子線医学センターを設立した。重粒子線によるが



病院長
野島 美久 氏



臨床試験部長
中村 哲也 氏



昭和地区事務部 医療サービス課
課長 小出 利一 氏

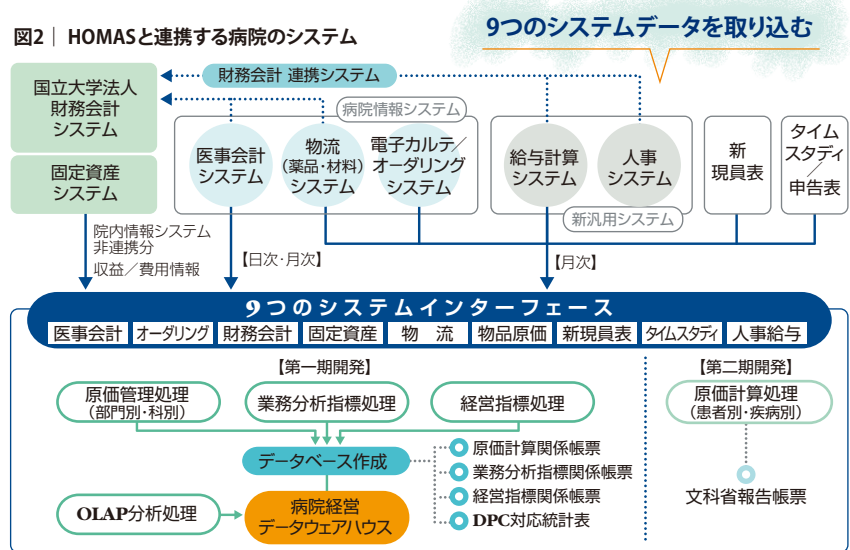
ん治療は、高度先進医療を行うという同病院の理念を具現化したもの。患者数は初年度から100人ずつ増加しており、「今年度は450人、将来的には年間600人を目標にしています」と野島氏。

また2013年4月には、厚生労働省が行う臨床研究中核病院整備事業の対象施設に選定された。全国10施設の中の1つで、担当する臨床試験部長の中村哲也氏は、「2001年に臨床試験部を設置して以来、倫理的観点を重視した臨床研究の管理・運営を行ってきました。倫理委員会で審査した後の実施状況についてもきめ細かく追跡調査を重ねてきたことを評価されたのでは」とこれまでの努力が認

められた結果とみている。対象施設に認定されたことにより、「治癒の見込みがなくなった患者さんに、まだこういう可能性があると言えることで希望を与えることができます」と、中村氏は臨床面での意義を強調する。

大規模災害に対応する病院作りも、同院の経営方針の1つ。東日本大震災の際に計画停電を経験した同病院は、重要設備・機器の無停電化、自家発電装置と燃料備蓄タンクの増設を行い、電力会社からの供給が途絶えても1週間は持ちこたえられる設備を整えた。「群馬は地盤がしっかりしているので、首都圏直下型の地震が起こっても当院が拠点病院として機能できるように備えています」(野島氏)。

図2 | HOMASと連携する病院のシステム



HOMASは様々なシステムのデータを取り込めるが、各システムのデータの意味を理解しているスタッフがいないければ、実際に取り込んで活用することができない。